

2022年1月8日（土）上演⑦

山梨県立身延高等学校

「ラフ・ライフ」

第57回関東高等学校演劇研究大会（東京会場）

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

八木沼 遼河（東京都立大崎高等学校3年）

「お笑い」とそれを通じての「家族仲」についてのメッセージが込められた劇だった。

緞帳が開いた瞬間、目に飛び込んで来たのは本格的な教室の大道具。袖幕を使い舞台の範囲を限定した上、開幕から客を劇の世界観に引き込む程のセットのクオリティに目を奪われた。しっかり作り込まれているのに、キレイ過ぎず、壁の貼り紙や乱雑に積まれたファイルなどが、学校の空き教室のリアリティを見事に表していた。

主人公となる薫が、下駄箱に入っていた手紙の主を、友人の遙と空き教室で待ち合わせている所から物語が始まる。ここだけだと、高校生らしい甘酸っぱい青春物か？と思うが、現れたのは希という女の子、聞くと、薫のことをずっと気に掛けていたらしい。では、同性愛の是非を問い掛ける作品？しかし、希の口から飛び出したのは思いもよらぬ言葉だった。

「私と漫才やって下さい！」

薫は急なお願いに困惑し断ろうとするが、遙の勧めもあり、文化祭での披露を目指してコンビを組むことを了承する。その後、文化祭実行委員長で、なぜか薫を目の敵にしている相馬さんと一悶着ありながらも、本番に向けて練習を重ねていく。が、希がお笑いにこだわるのはある理由があった。それは、仲の悪い両親のために好きだったお笑いに関係修復の手助けをしたいとのことだった。一見、楽しそうに見えることの裏には悲しみがあり、どんな人でもそれぞれ悩みを抱えているのかも知れない。そんなことを考えさせられた。

両親の離婚が決まり、結局ラフ・ライフの2人は、文化祭で漫才を披露することが出来なかったが、当初は実行委員長として漫才に反対していた相馬さんが今見せてよという場面は相馬さんの心境の変化や、希が新たに得た友達の大切さを感じられて感動的だった。彼女達の目的は達成出来なかったかも知れないが、この舞台から私たちは、「結果ではなくそれまでの過程で得たものが大切なんだ」と気付かされた。

音響や照明の効果も非常に大きかった。特に開幕の音響は印象的で、吹奏楽部の演奏やグラウンドから聞こえる運動部の掛け声など、一瞬で放課後の時間帯だと理解させ、劇のリアリティをさらに高めていた。また、役者の芝居の自然さにも驚かされた。役者の素が見えず、それぞれの登場人物が本当に存在するように錯覚させられるほど、キャラクターが出来上がっていて、丁寧な舞台だった。観ているうちに愛着が湧いてきて、彼女達のこれからはどうなるのだろうと終盤には名残惜しくなった。

私たち講評委員は希の悩みを通じて、『「笑い」を「感動」に変え、今の世の中だからこそ笑いましょう。』という強いメッセージを受け取った。「ラフ・ライフ」＝「笑いのある生活を」鬱屈とした現代の情勢だからこそ心に響くものがある。笑顔の裏には何かが隠れている。そんな言葉を体現するような、奥底に何か熱い思いが感じられる、そんな作品だった。

山梨県立身延高等学校演劇部の皆さん、お疲れ様でした。
ありがとうございました。

